

## 伊太利とくらゐ (十八)

瀧川 規 一

## 【聖フランシスの史的人物】

父に勘當されて

逆に父を僧正の面前で勘當した時は聖フランシスは二十五歳の時である。二十四五歳と云へば日本では官立大學を卒業して就職難を叫ぶ年齢である。聖フランシスは就職難を叫ばなかつたが廢寺再建難を痛感したらしい。父親からは一文も引出せない。彼はこの時普通の僧がよくないが如く諸方勸進に出かけて施物を集めるやうなことはしなかつた。フランシスは常に一段論法しか知らなかつた人であつたらしい。寺院を建てること云へば建てることであつて、他の前提や結論を考へなかつた。そこで彼は自ら石を集めだした。出會する人々に石の寄附を頼んだ。その間食べることはどうしてゐたであらう。衣服と金とは父に投げ返へしたが食料品は父から

依然として供給されてゐたのではなかつたか。如何にして食を得て居たか。彼は食べることの問題も矢張一段論法で片附けてゐた。他の乞食と同じく物乞ひをした。然し物乞ひをして貰つたパン屑のうち一番悪い部分のみを食し、よい處は他の乞食等に與へた。聖書にはパンを求めて石を與へられると云ふ皮肉な言葉がある。フランシスは逆にパンを求めずして石を求めたのである。この風變りな物乞ひが計らずも一種の人氣を喚起し、日常用事がなく暇な人間等はフランシスの遣り方が面白いと思つて手傳に出て來た。金持ちの連中も興味を感じて石を寄附した。彼は牛馬の如く遠近から大小の石をひきづり集めた。勞働價値を彼は斯くして知り得たと現代人は云ふであらう。彼の希望は斯くして遂

に目的を達し、セイント・ダミアン (San Damiano) の寺院は立派に再建が出来た。

其後三ヶ年の間フランスはアシシの町附近に住居して極貧の生活をなし、癩患者や浮浪者の世話をした。その間廢墟に等しい小祠堂聖マリア (Santa Maria degli Angeli) に行つて黙禱に多くの時間を費した。此處に於ても彼の建築氣分が動き祠堂は立派な建物となつた。更に聖ピータ (San Pietro) と呼ばれる教會をも改築した。以上の三教會はフランスの傳道史上に史的遺跡として重要な價值を有するものである。後にはこのダミアン寺院は聖クレア (Santa Chiara) と云ふ美貌を以て聞えた女性のセイントを頂く修道尼院の本據となつた。聖マリア祠堂は男性の修道院となり、フランスに讃仰する者や或は多くの家無き者等が集つて彼等の合宿所となつた。こゝに二人の傑出せる讃仰者があつた。聖フランスが貧困に陥り惡質患者と交り糴糶の乞食僧の群に交つてゐた際に當つて一人は現世の凡ゆる快樂慰藉物を投げすてて文

字通りに自己の財産の凡てを貧者に施與した。それはクインタヴァレ (Quintavalle) の住人バーナード (Bernard) と云ふ堅實にして富める市民である。この人は世間では氣狂扱ひにされてゐたフランスの様子を見て、靈界に起りつゝある非常な事業を看取した最初の人である。次は近所の教會の僧ピータと云ふ人である。この僧は既に分別盛りの年齢に達してゐたのみならず宗教界に於てカノンとなり相當の權威ある位置に居つた者であつた。然るに無分別に等しき行爲を敢へてなし奇矯な狂的青年としか思へぬフランスを見てその位置名聲を投げ棄て馳せ參じたのである。フランスとバーナード及びピータの三人は癩病院の傍に小さき小屋を建てて共同生活を營んだと云はれてゐる。こゝで或日のこと禮拜の文句が讀まれてゐると新譯聖書の馬太傳十章七節より十節に至る句が幻影としてフランスに現はれた。

これを以て彼は自己の天職なりと思惟し、翌日直にアシシに到り、幻影の教へるまゝに俗人

ながら貧者に説教を始めた。弟子が次第に増した。その弟子が彼と共に十二人に増加した時フランシスは彼等に云つた。『今は吾々の母である聖なる羅馬教會に行つて、主イエス・キリストが吾々によつて何をなし始めたかを法王に告げ、法王の許可を得て、主の告げる處を遂行しよう』と云つた。斯くて時の法王インノセント三世(Innocent III)の許可を得てアシシに歸り傳道をなしつゝ貧民に交つて働くことを以て終生の仕事となした。

聖フランシスの事業はこれにて大磐石の如き基礎の上に築かれたのである。然らば聖フランシスの傳道上の信念は如何なるものであつたか形骸が出来上り如何なる内的精神をそのうちに包藏したか。この問題は六つかしく云へば幾らでも六つかしく云へる問題である。然し吾等の如き凡俗の心にとつて非常に判り易い楔子が彼の祈禱の文句中にある。彼はキリストに捧げた祈禱の文句に、彼が貧困を愛した心の秘密を物語つてゐる。「貧(Poverty)は小屋のうちにあつ

た。汝が吾々人類を償はんがためになした大なる戦闘に貧は忠實なる侍の如く常に自らを武装した。汝の苦難の間貧のみは汝を棄てなかつた汝の母マリアは十字架の下にて足を停めた。然し貧は汝と共に十字架上に登り最後まで汝を堅く抱いた。汝が渴えて將に死なんとする時貧は注意深き配偶の如く汝の爲めに苦味を用意した汝は貧の熱烈なる抱擁のうちにこと切れた。貧は汝が死せる時汝を棄てなかつた。お！主なるイエス。借りの墓穴以外に汝の肉體を休ましめることを貧は許さなかつた。お！最も貧なりしイエスよ、私が汝に乞ふ恵は最高の貧と云ふ實物を私に與へられんことである。吾々の派の特別な標識は汝の名の光榮の爲めに太陽の下に如何なるものも自己のものとして決して所有せず、乞食すること以外に何等寺院の財産をもたぬことを許せ」と云ふのがフランシスの祈禱である。貧を熱烈に愛することがフランシスの精神の主調である。貧を擬人化する時フランシスの一弟子が作つた詩の題目の如く「貧婦人」

(The Lady of Poverty)と云ひ得るのである。アシシ寺院にはデオット(Giotto)が描いた壁畫に聖フランシスが(Lady Poverty)と神聖なる結婚式を擧げてゐる處がある。これは矢張り中世の武士の考へ方である。彼等は愛を擬人化した。現實には存在しても存在しなくても構はない一個の女性を心中に描いて精神活動の焦點としたこの風習は十二世紀及び十三世紀の初期に於て巴里の勃興をも凌ぐ南方佛蘭西の所謂プロヴァンサル文化に専ら流行した考へ方である。詩聖ダンテがベアツリチエを理想の最高處に置いたのも宗聖フランシスが貧女を理想としたのも考へ方に於ては差異がない。

聖フランシスは生來樂天的な快活な性質であつた。その反影が彼の派の規則中にも現はれてゐる。彼は托鉢僧が常に主を悦んで居るべきであると教へた。若き頃に知り覺えた歌唱を好んで歌つた。最後の病患に罹るやその多くの時を歌つて過した。生物無生物たるとを問はず自然物を愛した。甚稚氣を帯びて居ると云ふよりは

寧ろ詩人的氣質を露出したと云つた方が適當であるかも知れない種々の言動が傳へられてゐる。フランシスが鳥類に向つて祝福し説教をしたと云ふのは有名な話である。凡ての動物を彼は兄弟或は姉妹と呼んだ。自然物さへも兄弟姉妹扱ひにしてゐる。「被造物の賞揚」と題する彼の詩では「兄弟なる太陽」と云ひ、「姉妹なる月」と云ひ、「兄弟なる風」と云ひ、「姉妹なる水」と呼びかけて神を賞揚せんことを求めてゐる。最後の病患に際して彼は燒灼療法即ち灸をすえられることになつた。赤熱せる鐵器を見て「兄弟なる火よ」を叫んだのみならず、「今まで火を愛してやつたからこの際お手柔かに當つて貰ひたい」と火に注意を喚起した。彼は他人に對しては寛容であつたが自己に對しては極端に禁慾主義であつた。従つて自己の肉體を酷使した。克己自制の極、遂に肉體を消耗せしめた。アシシにあるデウンタ・ピサノ(Giunta Pisano)が畫いた聖フランシスの肖像は瘠せかけて、眼玉丈けが圓く、濃き眉をひそめ兩頬は肉落ち頗

の尖つた顔をしてゐる。白人としては色が黒い。

身體も亦瘠せてすらりと背高に見え豆狸のやうな顔付きをしてゐる。この肖像は聖フランシスの生前の様子を知つてゐる弟子達の暗示に基いてフランシスの死後二三年して畫いたものである。他の空想的な肖像畫とは異つて或は眞實に近いものであらう。この畫によつても察せられるが如く生前の肉體酷使の様子が窺はれる。彼は將に死なんとするやこの肉體に暇乞ひの言葉を云つた。「兄弟なる驢馬たるこの身體よ今日まで虐待されたことを許して呉れ」と云つた。斯うなると偽のやうな眞の話である。

聖フランシスは十一人の弟子を率ゐて羅馬に至り法王に宗團組織の公認を得てアシシに歸つて以來驚く可き程早く彼の事業が繁榮した。弟子等の説教、彼れが示した模範、及び彼等が實行した貧者に對する事蹟は伊太利北半及び中部を蔽ふウムブリア(Umbria)の外に宣傳され、多數の人々がこの派に加つた。恐らく時代の要求にこの團體の精神及び事業が適應したのであ

らう。

一九一二年には女性の聖キアラがフランシス派の制服を着るとを許され第二の僧團(Second Order)を創始した。この團體は尼のみからなる團體である。この聖キアラはリッポ・メモミ(Lippo Memmi)の畫いた肖像畫を見ると、誠に愛くるしい丸ぼちやの屈托の無い顔付きをしてゐる。眉は蛾眉で、兩眼はぱつちりと開いて鼻筋通り口元は小さく締まり邦人のうちにも見出しさうな可愛い顔をした娘である。彼女は一九四年にアシシの騎士の家に生れた。彼女の人並み優れた美貌と、兩親の非常な財産とが累をなして彼女には多くの誘惑があり結婚の申込みも多數にあつた。十七歳の時彼女は聖フランシスの説教を聞きその例に倣はんことを欲した。法話を聞いた女學生中に斯る突發的信心家を出すことは今日其道の人々の往々經驗する處である。聖キアラは時將に十八歳の芳期である。顔は、ぽい、ぽい様子をしてゐても自らの心を知らなかつた程な、ぽい、ぽいではなかつた。沙翁にあるロミオ

とジュリエット劇の女主人公ジュリエットは十四歳の時にあの悲劇をなしたのである。キアラに就いてはフランシスはこれ娘心の一時の氣紛れではないかと疑つた。フランシスは試験の爲めに先づ「アシシの町を乞食して歩け、今まで餘裕ある生活を放棄せよ」と命じた。キアラはそれを如實に實行した。而してフランシスに向つて「妾の家より救ひ出せ」と強請んだ。フランシスは女の決心の堅さを見て、それでは夜陰に花嫁の姿をしてポルチウンコラの聖ダミアン寺に來れと命じた。彼女が家を出奔する時は教團僧等をして道中松火を點して寺院に迎へ入れた。彼女が到着した時は祭壇に火を點じ、祭壇前に跪ける彼女の黒髪をフランシス自ら刈り取つた。フランシスは貧と禁慾と貞節とを誓はしめた後この修道院の制服たる僧衣を與へた。フランシスとキアラとの友交が濃やかにして常に變らなげな様子を見てその當時は勿論後世の史家までが「兩人の愛は現世の愛に非らずして天國に於ける愛なり」と云ひ、アシシの靈地を神聖なるロ

マンスの土地として考へた。然しキアラの出奔に就いては兩親は大に反對した。美しい娘の子を花よ蝶よと育て上げた甲斐もなく僧の勸進に會して家を出奔したことは慥に親泣かせの娘である。然し父親が没した後は彼女の妹等もその母親も亦彼女の居る尼院に入つた。聖ダミアン寺は最初彼女を住まはせる準備が出来て居なかつたので暫の間彼女はアシシのベネチクト派の寺院に預けられ三年後聖ダミアン寺に歸つた。其處で肉身の人々等も加はつて傳道修業の道にいそしんだ。間もなくその評判と共にその傳導は伊太利は勿論のこと佛國、獨乙に傳播され英國にまで入つた。尼院と化した聖ダミアン寺には尼衆が大に集り、その弟子等はキアラ即英語のクレアの意を以てクラリッサ (Clarissa) と自らを叫び教界の姉妹たることを標識し、以てフランシスカン派の第二團となつた。

團名を「貧しきクレアの尼團」(the Order of Poor Clares)と呼び其規則は聖フランシスの僧團の如く嚴格であつて、自發的に貧に甘んじ禁

戒を守り無言靜肅を嚴守した。尼僧等は文字通りに施物で生活し、若し施物がなければ斷食をなした。聖クレアも亦尼衆に範を示し極端なる嚴格な生活を送つた。それが爲めに健康を害し六十歳の時に危性なる疾病に罹り遂に物故したその教會に聖體を埋葬されたが死後二年にして聖人の稱號を許された。肖像畫に見る妙齡の一女性の發心は斯くして歐洲の天地に偉大なる陰影を遺したのである。

第一團(the First Order)は男性の僧の集團であるが、フランシス派には第三團なるものがある。第一第二の兩團は専門の聖職の人々の集團ではあるが第三團は全く俗人の團體である。第三の團員は僧籍に入らなくてもよい。普通の家庭の結婚せる男女が家にあつてフランシスの根本主義を奉じて居ればそのまゝ集團に加はることが出來たのである。従つて第三團には世界的に知名の俗人が多い。

貧者に身方をして常に裁判を下した佛蘭西の偉大な王族聖ルイス(S<sup>t</sup>. Louis)が居られる。英

國で十三世紀に有名であつた神學者アレキサンダ・オブ・ペールス(Alexander of Hales)が居り、蘇國の煩瑣學の哲學者ダン・スコタス(Dun Scotus)が居る。ダンテも居ればベーコンも居る法王が二人までも加つてゐる。近代には電氣學の祖ガルヴェニ(Galvani)も居ると云つた調子で世界に有名な人物を數多擧げることが出来る。

聖フランシスはサラセン人に福音を説かんが爲めに聖地に航海せんとしたが難船したので歸國した。西班牙にあるムア人に傳道せんと欲したがこれも亦果さなかつた。當時十字軍がダミエッタ(Damietta)を包圍してゐた埃及に入つて國王の面前に捕虜として引き出され、御前の説教をして遂に英軍陣地に送り還へされた。それよりバレストアインに可成長く滞在してゐた。彼の不在中フランシスカン派の集團には規則の餘りに嚴格過ぎるを好まぬ一派と嚴格に守ることを主張する一派とが生じ紛擾の萌芽が現はれてゐた。バレストアインからフランシスが歸るや彼は僧團の長を辭した。僧團の創始者ではある

が餘に老大になり過ぎた集團を統制すゝ才能を有たぬと自ら感じたからである。この時初めて上述の第三團が出来たのである。

聖フランシスが死する二年前、彼は數人の弟子を具してアペナイン山脈のアルベノ山 (Mt. Alverno) に登り四十日間斷食をなし祈禱と冥想とに日を過した。その時 (一二二四年九月の十四日の朝) にフランシスは幻影を見た。朝日の溫き光線の中に不思議なる一つの姿を見たのである。その姿は一人の天使 (seraph) が幾多の兩翼を擴げて平地線からフランシスに向つて飛び來り、言ふに言はれぬ愉快な感じにフランシスを包んだ。その幻影の真中に十字架がある天使はその十字架に釘づけにされた。その幻影が消え失せるとフランシスは最初の快感に交つて鋭き痛を感じた、心底から彼は惑つてその意義を闡明にせんと欲した時に彼の肉體は聖痕 (The Stigmata of the Crucified) 即ち基督が十字架上に受けた傷痕と等しき傷痕を得たことを發見した。斯うなるとどこまで史實であるか判らな

くなる。或者は釘を打たれて孔が開き血が出てゐる眞の傷だと主張する。或者は色と形とが釘の頭に似た肉瘤であり恰も釘を打ち込まれて釘の頭丈け外に現れ出てゐるやうに手の掌と背とに肉瘤があつたと云ふ。

アルベルノ山にお伴したフランシスの愛弟子は聖痕の形狀を詳く述べてゐる。或者はフランシスの死んだ時その痕跡を見たと言ふ。或者は斯る神秘説を斥けて全部聖痕を否認してゐる。吾々には只畫題として描かれてゐる點から興味を感じる丈けである。

フランシスはアルベルノ山に登つてゐる間に體力を消費したのでアシシにつれて歸られなければならなくなつた。歸つた後も衰弱を覺え苦痛を感じ殆ど盲目となつた。然しその間も既に述べた如く生來の快活で押し通した。遂に一二二六年十月三十日に没した。享年四十五歳。

二年後聖人としての列に加へられた。彼は斯くてポルチウンコロのサンタ・マリアで死んだが、その臨終に際して遺言し、遺骸は塵穢の棄



て場であり犯罪人の埋葬される處に葬れと云つた。弟子達は遺言の通りになしたが、一二二八年にフランシスカン派の代理總長エリア(Erlia)が時の羅馬法王の許可を得て聖人の墓の上に一大寺院(今日の下の教會)の基礎を定め礎式を行ひ、超えて一二五三年建築の完成されるや羅馬法王インノセント三世によつて、この寺院を聖人の靈に獻げる獻堂式が舉行された其後建物が増加され今日見るが如き偉觀を呈するサン・フランチェスコの一大伽藍となつたのである。

## 摘 錄

### ○朝比奈秀雄少佐述 南洋群島珊瑚礁の地形

(水路要報第四號 四月號所載)

一、南洋群島の地勢 本群島は東經百三十度より百七十五度、赤道より北緯二十二度に互る廣大な洋中に散布するマリアナ、カロリン及びマーシャルの諸島より成り、全群島の島嶼數(稍大なるものは六百二十三の多きに達するも其の總面積は三四九方哩九に過ぎず、之を全區域の海洋面積三百萬方哩に比すると一萬分ノ一に過ぎない。地質は一二の例外を除き

火山岩又は珊瑚礁から成る。マリアナ諸島の大部分は本邦產安山岩と性質を一にするのみならず山形も亦本邦の火山と同じく圓錐形を成し、ロタ、サイパン及びティニアン島を除く外は安山岩より成り地形急峻で平地少なく無人島が多い。カロリン諸島のトラツク、ボナペ及びクサイは玄武岩より成り海拔二千尺以上に及ぶ處があり、多くは山頂平坦である。パラオの主島は安山岩質集塊岩より成り、山頂は緩斜の穹窿狀をなし緩斜地が多い。マーシャル諸島には火山岩なく悉く珊瑚礁から成り、環礁がよく發達し各島の高さは數米を超えず狭小な帶狀を呈するものが多い。以上の外珊瑚裾礁は群島中陸地のある所必ず之を見る。堡礁はカロリン諸島、環礁はマーシャル諸島に卓越する地形である。隆起珊瑚礁はマリアナ諸島の南部にある。サイパン及びティニアン島の如きは數段の段丘を作つて居る。又パラオの南部諸島にも隆起珊瑚礁が發達し其の高きものは海拔二百二十米以上に達する。多雨の爲め甚しい浸蝕を受け地形急峻で且石灰岩に特有な地形が發達し、又海岸は海蝕の爲め聾狀を成すの奇觀を呈してゐる。猶ヤップ島には結晶片岩のあることは地質學上注目し價するものであり、アンガウル、ペリリユー、トコベイ及びフハエスは燐鎖を以て知られて居る。

二、珊瑚礁の地形 (一)珊瑚礁の一般的地形 珊瑚礁は裾礁、堡礁及び環礁の三つに大別される。此の内裾礁と堡礁との區別は判然しないが何れも火山島の外側に珊瑚蟲の群體がブ